

DoJa-4.1 API
iα ppli Development Kit
リリースノート

2.01 版

平成 18 年 4 月 14 日
株式会社 N T T ドコモ

改版履歴

版数	項目	種別	内容	
1.00	-	新規	-	2005年8月 FOMA 902i向け 制定 <iappli Development Kit for DoJa-4.1(FOMA)>
1.01	-	変更	改版内容	JBlend 部分の差し替えに伴う修正
			改版理由	JBlend 改版／不具合修正
1.02	-	変更	改版内容	GET での HTTP 通信時に Content-Length ヘッダが付与されてしまう不具合を修正
			改版理由	不具合修正
1.03	-	変更	改版内容	JBlend 部分の差し替えに伴う修正
			改版理由	JBlend 改版／不具合修正
	-	追加	-	CPBindingAuth 署名付与ツールを追加
1.04	-	変更	改版内容	Image#createImage における生成可能サイズ制限(240x240)を撤廃し、ヒープサイズが許容する範囲内であれば Image の生成が可能となるように修正
			改版理由	機能改善
1.05	-	変更	改版内容	・ MessageAgent#delete 実行時に正常にメッセージが削除されない事がある不具合を修正 ・ Graphics2#setRenderMode 使用時に透過 GIF を描画した場合 透過指定が無視される不具合を修正
			改版理由	不具合修正
1.10	-	変更	改版内容	JBlend 部分の差し替えに伴う修正
			改版理由	JBlend 改版／不具合修正
1.11	-	変更	改版内容	サウンド再生時の不具合を修正
			改版理由	不具合修正
2.00	-	変更	-	2006年2月 FOMA 902iS向け 制定
2.01	-	変更	改版内容	OnlineFelica で HTTP 接続エラーになる不具合を修正
			改版理由	不具合修正

1. はじめに

本書では、「iα ppli Development Kit for DoJa-4.1(FOMA)」の概要と制限事項について説明します。

1.1 機能概要

「iα ppli Development Kit for DoJa-4.1(FOMA)」は、i アプリの実行環境を Windows 2000 もしくは、Windows XP 上でエミュレートすることによって、i アプリの開発を支援するソフトウェアです。また、Java 開発者向けの NetBeans や Eclipse といった統合開発環境（IDE）と連携が可能で、エミュレータの機能を駆使せずとも i アプリの作成を進めることができます。詳しくは、「iα ppli Development Kit ユーザーズガイド」を参照してください。

1.2 制限事項

1. 「iα ppli Development Kit for DoJa-4.1(FOMA)」の赤外線による OBEX 通信は、Windows98 では、irxfer.exe を、Windows2000/XP では、irmon.dll を利用しています。このため、「iα ppli Development Kit for DoJa-4.1(FOMA)」と移動機間での赤外線による OBEX 通信はできません。なお、「iα ppli Development Kit for DoJa-4.1(FOMA)」同士の赤外線による OBEX 通信は可能です。
2. TextBox および Canvas imeOn() に関する制限事項
 - processEvent() の KEY_RELEASED_EVENT 処理内で Canvas.imeOn() を呼び出して FEP を起動したとき、1 回目の Enter キー押下が無視されます。
Enter キーによる確定動作のためには、Enter キーを 2 回押下してください。
 - DoJa-4.1 では、FEP における改行コードは CRLF("\r\n") に統一されていますが、LF("\n") も使用可能です。
しかしエミュレータでは、改行コードに LF("\n") を使用した場合に正しく改行コードと認識されず、スペースに置き換わって表示されてしまう場合があります。
改行コードには CRLF("\r\n") を使用するようにしてください。
3. Camera に関する制限事項
エミュレータでは実際の画像撮影は行なわれず、takePicture() メソッド呼び出しで Windows のファイル選択ダイアログが表示され、選択された画像ファイルが撮影画像としてアプリケーションに渡されます。
この仕様により、以下の点で実機の動作と異なります。
 - 撮影画像サイズセットした Camera オブジェクトでの撮影においても、取得される画像サイズは選択画像ファイルに依存します。
4. トラステッドアプリから HTTP 通信を行なう場合に、User-Agent ヘッダへのトラステッド ID 付与は自動的には行なわれません。
User-Agent にトラステッド ID が付与された状態の試験を実施する必要がある場合は、アプリケーション動作環境設定ウィンドウネットワーク設定タブの User-Agent を変更して実施してください。

5. **AudioPresenter、Audio3D に関する制限事項**
本版では、通常再生モードでのサウンド再生に DirectX 8.1 以降が必要です。
「通常再生モード」では、com.nttdocomo.opt.ui.AudioPresenter2 の鳴動は再生されません。
6. **ApplicationStore に関する制限事項**
selectEntry()メソッドは、本来ユーザ操作によって端末に保存されている i アプリのエントリが選択されるメソッドですが、エミュレータではアプリー一覧は表示されず、固定のエントリ ID が返却されます。
7. **CallRecord に関する制限事項**
getLastRecord(int type)は、引数 type により着信履歴(CALL_IN)/発信履歴(CALL_OUT)を指定して取得できますが、エミュレータでは何れを指定しても着信履歴ファイル (lib/phonehistory/phonehistory.lst) の先頭の内容を返します。
8. **i アプリオプション A P I PictureLight に関する制限事項**
setColor()で、高輝度発光中に呼び出すとタイミングによりライトの色が変化する事があります。
9. **仮想 FeliCa データファイルビューワに関する制限事項**
フリー領域を使用するアプリケーションは A D F の FeliCaCPID と FeliCaPIN の値を仮想 FeliCa データファイルに適切に設定する必要があります。
10. **Graphics3D に関する制限事項**
プリミティブ描画の際、レンダリング時 (Graphics3D.renderPrimitive()メソッド呼び出し時) に指定するプリミティブ属性に Graphics3D.ATTR_BLEND_ADD または Graphics3D.ATTR_BLEND_HALF を指定すると正常な描画結果が得られないことがあります。これは、エミュレータがピクセルの色情報を RGB 各 8 ビットで保持しているのに対し、3D グラフィックスエンジンが行なう半透明描画演算ではピクセルの色情報を RGB 各色につき上位 5 ビットのみをその演算対象としていることに起因します (これは 3D グラフィックスエンジンの仕様となります)。実際の携帯電話上では、i アプリ実行環境で保持する色情報と 3D グラフィックスエンジンが行なう描画演算の精度は一致しているため、このような問題は発生しません。
なお、エミュレータ上で本問題を回避するには、プリミティブが描画される背景の各ピクセルについて RGB 各色の下位 3 ビットをマスク (0xf8 との論理積をとる) します。ただしこの場合、描画データが本来持つ色情報が部分的に失われるので注意が必要です。
11. **エミュレータ機能に関する制限事項**
本版ではデバッグトレース機能は使えません。

2. 起動方法

「iαppli Development Kit for DoJa-4.1(FOMA)」は、大きく分けて2通りの起動方法があります。一つはiαppliToolを起動する方法で、もう一つは、iアプリを単体で起動する方法です。

2.1 iαppliTool の起動

Windows の『スタート』⇒『プログラム』⇒『iαppli Development Kit for DoJa-4.1(FOMA)』⇒『iαppliTool for DoJa-4.1(FOMA)』を選択するか、コマンドラインから引数なしで `doja.exe` を実行すると、iαppliTool が起動します。

また、`doja_g.exe` を実行すると、デバuggが可能なiαppliTool が起動します。

`doja.exe` および `doja_g.exe` は、

「iαppli Development Kit for DoJa-4.1(FOMA)」を `c:\iDKDoJa4.1` にインストールした場合：

`c:\iDKDoJa4.1\bin`

の下にあります。

2.2 iアプリ単体の起動

コマンドラインから、

`doja.exe -i ADFファイル`

を実行すると、ADFファイルを読み込み、ADFファイルと同じディレクトリにJARファイルがダウンロードされたとして、iアプリが実行されます。

例：

`doja.exe -i ..\apps\CarRace\bin\CarRace.jam`

または

`doja.exe クラス名`

例：

`doja.exe TestCanvas`

`doja.exe` では次のようなオプションを指定できます。

- ・ `-mx` ヒープサイズ[K|M] (Byte) 例：`-mx 8000K -mx 8M`
(このパラメータは、他のパラメータより最初に指定してください。)
- ・ `-i` ADFファイル
- ・ `-s` スキン名
- ・ `-version`
- ・ `-help`
- ・ `-t` 起動タイプ番号
(0: 通常起動 1:初回起動 2:タイマ起動 3:待受起動 4:外部機器起動 5:ブラウザ起動
6:メーラ起動 9:即起動 10:受信フォルダ起動 11:送信フォルダ起動 12:未送信フォルダ起動
13:アプリ連携 (アプリ内から))

※ 起動したアプリがアプリ連携をする場合は、必ず `-t 13` を指定してください。

- -j JARファイルのパス
- -u ADFへのURL
- -w Windowsの親ウィンドウのハンドラ値
- -p 起動パラメータキー 1 起動パラメータ値 1 . . . -p 起動パラメータキー 16 起動パラメータ値 16

doja_g.exe では次のようなオプションを指定できます。

- -debugger
- -suspend
- -nosuspend
- -jdkpath JDKのインストール先ディレクトリ
- -port デバッグエージェント間デバッグ用ポート番号
- -debugport IDE間デバッグ用ポート番号

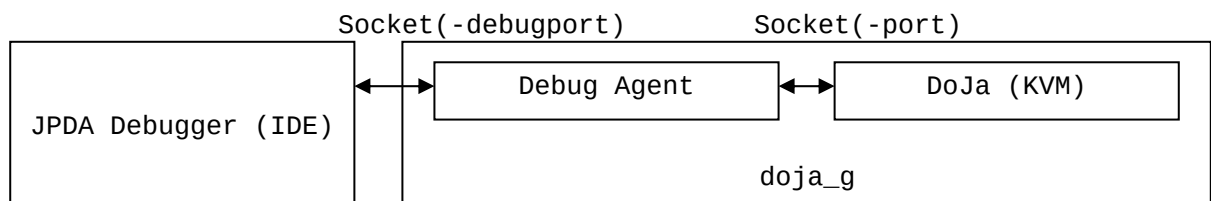


図 2-1 デバッグインターフェースアーキテクチャ